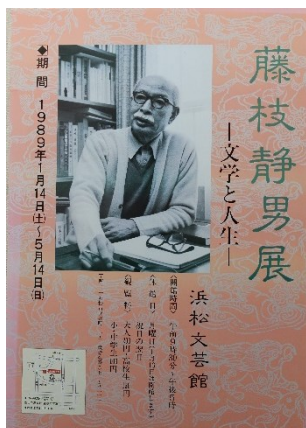


特別収蔵展 開催中

平成27年3月3日(火)まで

「ポスターで見る 浜松文芸館のあゆみ」



ポスターと多くの資料から、『浜松文芸館のあゆみ』を振り返ろうと企画しました。『浜松文芸館』第3回の展示会は、作家『藤枝静男展』でした。藤枝静男展は、その後6回開催されています。

「藤枝静男」(1908~1993)は、志太郡藤枝町市部(現藤枝市)生まれ。本名勝見次郎。

藤枝静男は、若いころから文学に強い関心をもっていた。成蹊学園時代から小説類に耽溺。八高時代に北川静男、平野謙、本田秋五と出会い文学への情熱を高めていった。

〈第3回ポスター〉 医師であり小説家でもあった彼の生涯における輝かしい業績は、この浜松地方において成し遂げられた。彼の小説や随筆の中にも描かれているように、この浜松地方の風土に愛着が強かった。それ以外にも旅を好み、美術品を愛し、自らも絵を描き、中でも骨董品への関心は特に強く、彼独特の審美観をもっていた。幅広い趣味をもち、彼の小説をより奥深いものにしていく。 主な作品：『空気頭』 昭和42年度芸術選奨文部大臣賞受賞

『愛国者たち』 第2回平林たい子賞受賞

『田紳有楽』 第12回谷崎潤一郎賞受賞

『悲しいだけ』 第32回野間文芸賞受賞

《浜松文芸の先駆者 参考資料より》

文芸館の四季

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

暦の上ではもう春ですが、まだまだ寒い日が続いています。今年になって、「この冬一番の寒波……」という言葉、何度聞いたことでしょう。

文芸館の周りではたくさんの種類の植物が、季節ごとに様々な花を咲かせ、見る者の心を和ませてくれます。

この時季、ヤブツバキ(藪椿)の花が緑の中に紅い顔を覗かせ、冷たい風に揺れています。ヤブツバキの花言葉は「理想の愛」「謙譲」だそうです。

緑の中にひっそりと咲くヤブツバキ、落葉の上にポトリと落ちた紅い花も寂しげで、「謙譲」という言葉がぴったりです。

* 落(おち)ぎまに 水こぼしけり 花椿 松尾芭蕉



井上靖と浜松 9

「黯い海」の底流をなす詩「カマイタチ」

「カマイタチ」は、昭和22（1947）年の作で、詩集『北国』に収められている。

学校へゆく途中に犀ヶ厓といふ小さい古戦場があった。昼でも樹木鬱蒼とした深い谷で、橋の上からのぞくと、谷底にはいつも僅かな溜まり水が落ち葉をひたしてゐた。ここは日暮れ時にカマイタチが出るといふのでみなから怖れられていた。カマイタチの姿を見たものもない。足音を聞いたものもない。が、そいつは風のようにやってきていきなり鋭利な鎌で人間の頬や脛を斬るといふ。

（略）、私が人生への絶望的な思惟の最初の一步を踏み出したのは、恐らくこの時なのであらう。私はいまでも、よく、ふとカマイタチのことを思ひ出すことがある。突如、全く突如、人間の運命の途上に偶発するカマイタチ的エア・ポケットの冷酷なる断裁！すでに犀ヶ厓は埋立てられ、何年前から赤土の街道がまっすぐに旧陸軍飛行場に走っているが――。

井上靖の初期を代表する長編小説「黯い潮」は、この詩の書かれた3年後の昭和25年7月号から10月号まで「文芸春秋」に連載された。この年の2月に靖は「闘牛」で芥川賞を受賞している。

1年前の24年夏、下山国鉄総裁の不可解な轢死事件が起こり、当局の必死の捜査にも拘わらず真相は謎に包まれ、自殺・他殺の両説が拮抗、靖が勤務していた毎日新聞は自殺説をとっていた。靖は初の総合雑誌連載に際し、下山事件と「カマイタチ的エア・ポケットの冷酷なる断裁」を書いたのである。

主人公の中年の社会部遊軍記者速水貞夫は、寂しさを身にまとった絶えず隙間風に吹かれているような醒めた男として描かれる。「あすなる物語」にも登場する靖自身を投影した人物である。中学時代に怖れた何の前触れもなく偶発するカマイタチのように、16年前、結婚3年目の妻が突然流行歌手と熊野灘で心中してしまう。

作者は、下山事件の真相を正面から追及するのではなく、主題の背景として描いている。しかし、「事件の発展経緯にはいかなる作為も加わっていないし、誤ったことも書かれていない」（「自作改題」）と語っている。

井上靖が詩に書いた犀ヶ厓は、今から94年前の大正10年の犀ヶ厓であるが、新田次郎の「武田信玄山の巻」に、その時から349年前の三方原の合戦時の犀ヶ厓が登場する。

犀ヶ厓は浜松城の北十丁ほどのところに、東西約十二丁に延びた自然の堀があった。深さ約十五尺ないし二十尺、幅約十尺ないし二十尺で、浜松城の深沼に連なっている。長い年月の間に水蝕作用によってできたものとされているが、広々とした三方ヶ原の台地の中にこのような溝の存在はまことに奇妙である。

犀ヶ厓の存在に眼をつけた家康がこの自然の堀を北に配して、浜松城を築いたとも云われている。

犀ヶ厓は切り立ったようになっていて、落ちこめば生命にかかわる高さである。

犀ヶ厓には、大島蓼太の「岩角に兜くだけて椿かな」の句碑が立っている。